

NJ素流協 News

平成22年12月31日 第72号

平成22年12月31日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

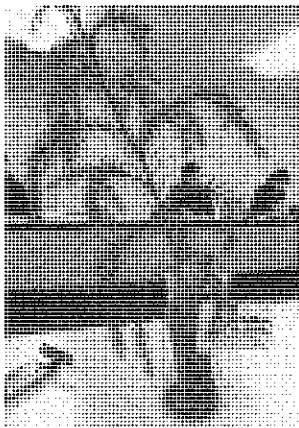
第一回フォレスト再生モデル

実証事業プロジェクト委員会を開催

十二月十四日(火)午後、盛岡市農林会館において、第一回フォレスト再生モデル実証事業プロジェクト委員会が開催された。

同事業は今年度からNJ素流協が新規に取り組んでいるもので、人工林伐採跡地の再造林の阻害要因の一つとなっているコストを削減するため、新しい作業システム等を構築・実証し、再造林が今後確実に行われるようになることを目的としている。事業の具体的な内容は次の通りである。

人工林の伐採から植栽(一部下刈)において、重機等使用による連結作業の実施(主伐時の地拵え



開発中のコンテナ苗

同時施工、主伐前の刈払い実施)や植栽方式の見直し(低密度植栽、大苗、ポット苗あるいはコンテナ苗使用)等によるコスト削減と更新確保を検討する。

実施面積の合計は概ね一〇ヘクタールとし、五〜一〇箇所(一箇所当たり一〜二ヘクタール)で行う。

実証林は、組合員から協力の申し出のあった林地からプロジェクト委員会の検討を経て選定する。作業については、事業実施者となった組合員が作業日誌等を整備し、作業ごとの稼働日数、稼働労働量、稼働機械量が把握できるようにする。

本事業の年度計画は、平成二二〜二四年度で試行実施し、平成二五年度に本格実施することを目指す。事業実施者は地元市町村、森林組合等と連携を密にし、造林補助金等の交付申請を行

う。これに対しNJ素流協は、事業経費のうち事業実施者の自己負担となる部分について、予算の範囲内で助成する。その金額は、平成二十二年度についてはスギ植栽の場合一件二十二万円、カラマツ植栽の場合には十六万円とする。

今回のプロジェクト委員会では、組合員からの事業実施協力書の提出を受けて実証林の選定を行ったほか、低コスト更新事例の報告、事業推進上の課題についての意見交換などを行った。なお同委員会の委員には外部機関・団体の有識者が委嘱されており、本事業の内容の検討、事業実施の確認・調査、取りまとめ等を行っていくことになっている。

組合員七名から挙げられた実証林候補地十三箇所については、現地調査報告書に基づき、林地の位置や樹種・林齢、地拵えと植栽の計画内容と進捗状況、造林補助金の申請状況を比較・検討し、うち九箇所を実証林として選定した。実証林となった林地は、どれもス

ギカカラマツ（一部アカマツ）の概ね四〇〜五〇年生で、今年秋から来年春に伐採、引き続き地拵えを行い、来年三〜四月に植栽を行う計画となっている。

選定の際に委員が注目したのは各林地の傾斜で、平坦地から斜度四五度程度の急峻な斜面まで様々あり、中には重機の使用が困難な林地もあるなど、我が国林業現場の現実を示すモデルとなりそうである。

また植栽密度については、ほとんどの候補地で事務局が示した低密度植栽本数（スギ二二〇〇本／畝、カラマツ一九八〇本／畝）に近い本数を採用しているが、三〇〇〇本／畝植栽予定の林地もある。さらに苗の種類については、コンテナ苗を採用する林地が一箇所ある。

実証林に選定された林地では、地拵えが終了した時点で事務局に終了報告を行い、終了確認を受けることになっている。事務局はこの結果を委員会に諮り、完了の答

申があれば、組合員に対して助成金を交付する。植栽作業が終了した時点でも同じように報告、確認、委員会への諮問の手順を踏む。

またそれぞれの終了報告時には組合員から作業日誌を提出してもらい、労働量や経費の実態をとりまとめ委員会に提出、次年度の事業内容の検討を行うこととしている。

低コスト更新事例の報告では、委員である岡森林総合研究所林木育種センター東北育種場の星育種課長から、初期成長優良品種の植栽試験の結果報告と、キャビティコンテナで育てたコンテナ苗に関する説明があった。

植栽試験は、N J素流協が昨年度から岩手県遠野市の人工林伐採跡地で行っている低コスト造林試験地の一角で行われた。三年生、平均苗高六〇cmのスギ、カラマツ大苗について生存率や成長状況が調査され、植栽二年目の現在、いづれも良好な成長を示していると報告された。注目すべきは、植栽

木の成長が旺盛で下刈の回数が極端に抑えられていることで、カラマツで二年目に一度だけ、スギについては不要であった。下刈経費削減で、低コスト施業の実現に有望と思われる。

現在研究が進むコンテナ苗は、培地を用いて一枚のコンテナに二四〜四〇本の苗を育てるもので、育苗に際し植替えの手間がなく、一年で出荷可能な苗をハウス生産できるので、コストの削減に効果があると説明された。苗木代は二年苗で一本一六〇〜一七〇円と割高だが、植付作業の効率が良いことから低密度植栽なら元がとれ、平成二十九年には一般の市場に出回ることである。

N J素流協外館経営企画部長からは、林木育種センター星育種課長からも報告された遠野市試験地における低コスト再造林試験の経過報告があった。同試験地では平成二十一年一月伐採後すぐに重機による地拵えを行い、四月にカラマツ、スギの大苗を植付けた。

地拵えから日数があいたので、植栽時には重機は使用していない。その結果、通常の造林作業に比べて労力で三九%、経費で三三%の削減となった。その要因には重機と大苗の使用の効果の他に、伐採後直ちに地拵えを行うことでその後の下刈が軽減あるいは不要となった効果もあると報告された。

その他の協議事項として、本事業を進める上で検討や確認を要する点として、委員より次のような発言があった。

◇高性能林業機械等による伐出のための作業路は除地として扱われ、造林事業の対象とならない。また作業路の用地確保により、植栽本数が左右されることにもなる。ただし将来的な作業全体の低コスト化のために作業路は大変重要になるので、よく考慮する必要がある。

◇大苗、コンテナ苗の使用は、現状の造林補助金制度では補助金対象とならない。しかし植栽工程の改善や下刈軽減など、コスト削減効果が期待できることから、制度

フォレスト再生モデル実証事業 プロジェクト委員会出席者名簿

所 属	役 職	氏 名
森林総合研究所 林木育種センター東北育種場	育種課長	星 比呂志
岩手県森林整備課	主任主査	鈴木 清人 (代理 高橋 翔子技師)
岩手県林業技術センター	主任専門研究員	高橋 美恵子
岩手県森林組合連合会	森林整備グループ長	佐々木 信夫
岩手県緑化推進委員会	森林学習指導員	小野寺 秋男
NJ素流協	理事長	下山 裕司 (委員長)

改正の一つのポイントとして担当
部局に申し入れをしていきたい。
◇補助金制度要件として、岩手県
では今年度から最低植栽本数が従
来の二〇〇〇本/畝から一〇〇〇
本/畝に引き下げられた。また地
拵を終了時点で補助金申請ができ
ることになったが、その場合地拵
えと植付は同一の事業者が行うこ
とが条件となっている。現状では
植付は地元森林組合に委託する場



事前の予告をあえてせずに、到
着したトラックをランダムに選び、
実施した。

丸太受入検査 実施報告

十月十三日(水)宮古市ホクヨー
プライウッド(株)にて、同社資材担
当中山課長、同伊香氏、NJ素流
協高橋常務、同小野寺部長立会い
のもと、素材の丸太受入検査を実
施した。

合が多いが、合理的な低コスト追
求のためには、伐採から植付まで

総合的に実施できるようになるこ
とが望ましい。

各々搬入した丸
太について、納
品書への記入径
級、長さ、曲が
り、腐れ、番号
記入の状況を検
査した。

丸太受入検査結果

組員	納品書 記入	径 級	長 さ	曲がり	腐 れ	番号記入	その他
A	○	△	○	○	○	○	
B	○	△	×	○	○	○	
C	○	○	○	○	○	○	

○・・・適合、△・・・軽微な不適合、×・・・不適合

問題にされる不適合である。この
組員に対しては、造材の際に注
意するよう直接指導を行った。
その他の規格外れとしては、丸
太木口に記入された径級が実際の
径級と違うものが若干あった。ど
の組員も実際の径級より小さく
記入する傾向があり、また本数に

についても実際には納品書よりも多
く納入しており、これらに関して
は結果的に工場には損害を与えて
いないことが確認された。

組員の出材丸太の品質を向上
させ、現物と納品書の整合性を高
めることにより、工場との信頼関
係を維持するために、今後とも定
期的に検査を行う予定である。

NJ素流協高橋常務 合法木材国際 シンポで事例発表

十二月十一日に東京都明

で開催された「合法証明木材等
に関する国際シンポジウム二〇一〇」
に高橋常務が出席し、合法木材推
進の事例を発表した。NJ素流協
では組員に対し研修受講を義務
付け、冊子や資料を配布している
が、日本国内の中小製材工場では
合法証明が要求されないため、供
給者側も証明を行わないことが多
い。合法木材の普及には、その利
用の成果を「見える化」すること
が必要だと話した。

一葉 樹木の病害虫(9)

マツつちくらげ病

松くい虫被害と並んで松を集団的に枯らす被害に「マツつちくらげ病」がある。この病気はその名前とともに、発生生態が一風変わっている。

この被害は間伐作業場の焚き火跡、山火事被害地の周辺(写真1)、公園やキャンプ場の炊事場など火を使った場所を中心に発生する。松くい虫被害木を焼却した場所で発生することもある。また、山火事被害地に植栽したアカマツが全滅した事例(写真2)もある。

病原菌は、通常は枯葉や衰弱した根に付いて細々と生きており、発芽力が弱く発芽しないで死んでしまうものが多い。ところが地温が高くなると発芽力が強くなり、更に高温で他のライバルの菌類が死滅すると、急激に繁殖し、健康な松を枯らす。

この病原菌は、根から侵入して形成層(あま皮)を侵蝕し(写真

3)根を殺すので、被害木は衰弱してついには枯れる。

被害木の根元や近くの地表には子実体(きのこ)が発生するが、その形が写真のように変な形をしている(写真4)ことから土水母(つちくらげ)と名づけられた。

新鮮な子実体はチョコレート色に白い縁取りがあるが、徐々に黒くなり、最期には乾燥してカサカサになる(写真5、6)。

被害は、最初焚き火跡等を中心に数本が枯れ、この範囲が一年に約四〜五メートルずつ拡大する。多くの場合、被害は三〜五年位で自然に終息するが、直径一〇〜二〇メートルの範囲の松が枯れる。

○メートルの範囲の松が枯れる。防止対策は予防につきる。松林の中あるいは近くで焚き火をしないことである。また、山火事跡地に松類を造林する場合には、附近に子実体が発生していないことを確認して実施する必要がある。

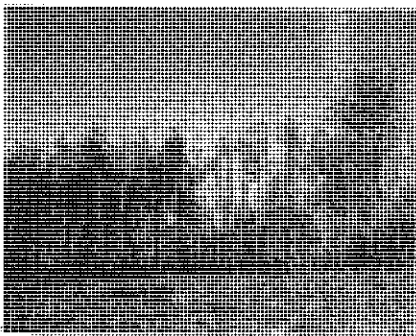


写真1 山火事被害隣接地に発生した被害



写真2 山火事跡地に植えたアカマツの枯れ

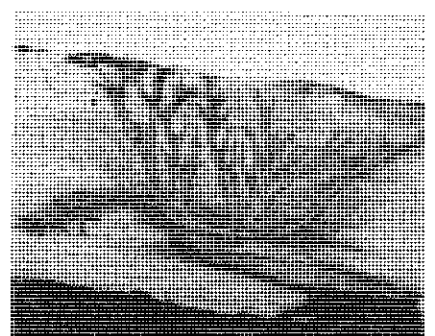


写真3 形成層(あま皮)の部分に侵蝕する



写真4 地際部分に発生した子実体(きのこ)



写真5 新鮮な子実体はチョコレート色に白い縁取りがある



写真6 古くなると黒くかさかさに乾燥する

平成二十二年度

工場視察見学会及び地域懇談会

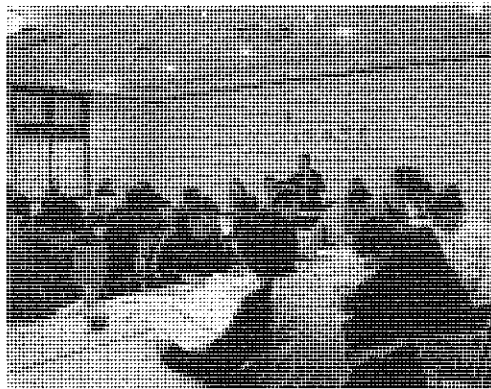
十二月二十二日(水) 組合員対象の工場視察見学会と地域懇談会(原木供給説明会)が、岩手県住田町と大船渡市を会場として開催された。当日はあいにくの大雨にもかかわらず、四〇名余りの組合員が参加した。

午前中は住田町の三陸木材高次加工協同組合と協同組合さんりくランバーの工場を、代表理事中川信夫氏の案内で見学した。

さんりくランバーでは原木の受入からラミナの製材、乾燥までを行っている。各工程は、リングバーカーによる樹皮の除去、ツインバンドソー(帯鋸)、ギャングリッパー(板の小割り機械)による製材、乾燥、棧積みまでほぼ全ての工程が自動化されており、一日あたり一八〇m³の生産能力を持つ。

さんりくランバーで製材されたラミナは隣接する三陸木材高次加工協同組合の工場へ運び込まれ、各種集材材に加工される。用途は柱、梁等住宅用構造材で、大手ハウスメーカー向けの注文生産もある。最近

は岩手県内の素材が集まりにくくなっており、北海道産ラミナも使



地域懇談会(原木供給説明会)

用している。

大船渡市への移動途中、昼食会場で懇談会が行われた。事務局から、今年度の合板工場向け出荷実績の推移、新規事業の概要等の説明があった。質疑応答では、納材

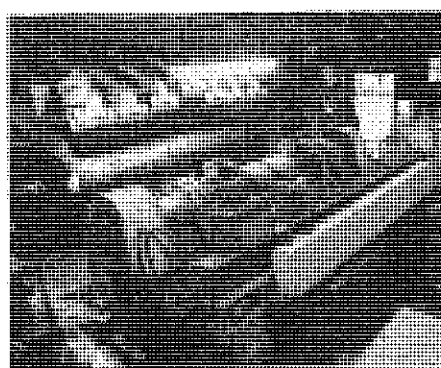
の注意点について質問があり、事務局から「工場から特に厳しく注意を受けるのは長さ規格の遵守で、節の大きさについても注意して欲しい。曲がりについては、曲がった四m材でも二m材に切れば利用できるの、採材を工夫して欲しい」との回答があった。

大船渡市では北日本プライウッド(株)の合板工場を視察、川村取締役総務部長より工場の概要説明を受けた。

同工場はもともと大径の南洋材を原料として使用していたが、平成十五年から二十年にかけて十三億円を投入して小径国産材対応の設備に転換、現在は国産材の使用比率を五〇%からさらに上げようとしている。川村部長は、「欧米と違って日本の山は傾斜がきつ、素材の生産は厳しい。皆さんの苦労と思いの入った原木を最大限に生かすため、歩留の向上に主眼を置いて取り組んでいる」と話した。

その後グループに分かれ、ラインを追って工場内を見学した。樹

皮を取り除いた原木は高温の蒸気で材を柔らかくした後、ロータリーレースでかつら剥きにして、単板に加工する。屋内を高架橋のように縦横にラインが走り、単板の接着、プレス、仕上げと順次流れていく。



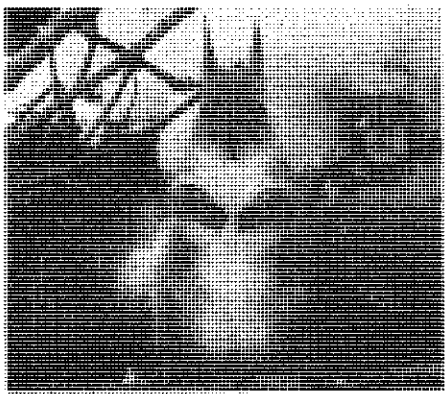
工場見学(北日本プライウッドのロータリーレース)

最後に原木の品質・規格についての注意点を、資材課菅野氏に伺ったところ、「長さ規格のプラス・マイナス五cm以内を守って欲しい。出張った節のあるものもロータリーレースに入らないので、予め落として納材して欲しい」との話があった。N J素流協では、今後も組合員研修等の機会をとらえて見学会や懇談会を開催していく予定である。

作業道散策
9

りす (栗鼠)

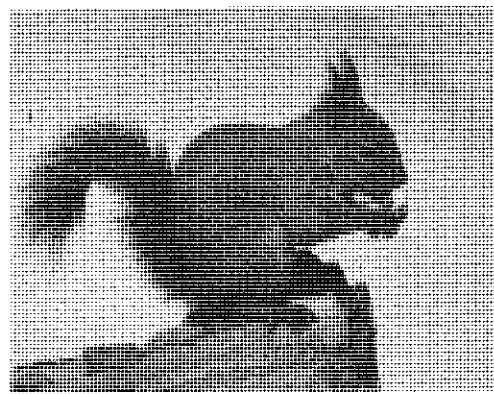
絵本やアニメでおなじみの背中に筋があるのはシマリスで日本では北海道にしか生息しない。東北地方にいたるのはニホンリスで、頭と胴の長さが一六〇二二cmで、尻尾がふさふさで頭の上に出るぐらい長い。背面は赤褐色で、腹部は白い。冬は背面が灰褐色になり、耳の先端に房毛が生じ、冬眠はしない。



ウサギでもトトロでもありません

最も身近な野生動物で、姿や動作が可愛らしく、童話や民話にも登場し、「身近な環境指標動物」と

して調査の対象になっている。岩手県滝沢村のお年寄りから面白い話を聞いた。



2つに割ったクルミを持って食べる

これはナ、昔でなくて五年位前の話さ。あの年はクルミが不作だったんだ。さっぱり落ちてねえクルミを一生懸命拾ってたんだ。なんだか後ろでキキキキって声があるの振り返るとリスだったんだ。気にもしねでいたんだけど、どこまでも、どこまでも、ついて来るのさ。腰も痛くなつたんで一休みしている、目の前の木の枝で、こつちを向いて手を摺り合わせて

何か言ってるみてなんだ。おら、リスの言葉分からねども、じっと見ていると、なんだか分かってきたんだ。「そうか、分かった。心配するな。正月のクルミ餅作るのに少しばかり分けてくれや、全部は拾わねから。いっぱい貯めて、来年は丈夫な子っこ育てるよ」って言ったんだ。そしたら安心したみてに林の中さ姿を消したんだ。なんだか、ペコッと頭下げて行ったような気がしたナ。

冗談欄 病院風景 (その1)

- ◇冬になり寒くなると風邪などで病院へ行くことが多くなる。そこで病院風景を描いてみた。
- 愛嬌の良い病院で
- ◇受付↓検査↓診察↓会計までが一〇分とかからなくてよいのだが、少し心配だ。
- ◇熱が出たので診てもらったら、「インフルエンザということではないかでしょうか」と言われた。
- ◇体重が急に減ったら、「身長も少し減っているの、まあいいでしょう」と言われた。
- 待合室で
- ◇お婆さんを車椅子に乗せてきた看護師さん、離れる時に「チョット待っててくださいね。すぐにお迎えが来ますからね」と優しく言っていた。
- ◇ものすごく顔色の悪い人が「あー、あとどれくらいかかりますか」受付で聞いていた。三〇分ぐらいと言われて、「三〇分も耐えられません。また明日来ます」と帰って行った。
- 眼科で
- ◇目薬をさしてもらいパチパチしてと言われた子供、手をパチパチと打っていた。
- ◇眼鏡をつくらうと視力検査を受けていた中年男性、「輪に切れ目が入っていません」と自信たっぷりな答え、「眼鏡は無色ですか」と聞かれたので「いえ、公務員です」と答えていた。
- 婦人科の壁に
- ◇「乳がんは男性にも、まれながら見つかります。」そして、女性の「乳がんは男性に、まれながら見つかります。」

平成22年12月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約500m³減少、カラマツが約3,280m³減少、アカマツが約100m³減少し、全体では約4,050m³減少している。昨年同月と比較すると、スギが約1,300m³減少、カラマツが約3,410m³減少、アカマツは約1,670m³増加し、全体では約2,960m³減少している。工場別ではホクヨープライウッドが前月比較で約2,870m³減少、昨年同月比較では約4,300m³減少、北日本プライウッドは前月比較では1,070m³減少、昨年同月比較では約890m³増加となっている。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約1,110m³減少している。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約60m³増加、昨年同月より約480m³減少している。
- 3 今年度の年間計画量に対する9か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を75%とすると、今月の合板用出荷及び全体出荷実績は、計画数量を7.1~10.7ポイント上回る進捗状況となっている。

(m³)

樹種	長級 (m)	販売先				計	今年度累計		
		合板用			その他		合板用	その他	計
		ホクヨープライウッド(株)	北日本プライウッド(株)	その他					
スギ	2.0	2,607	2,972	451	6,030	57,887	48.4	13,414	104,630
	4.0	1,713	2,289		4,002	33,329			
	計	4,320	5,261	451	10,032 (591)	723			
カラマツ	2.0	3,360	1,405		4,765	52,133	41.1	1,914	79,351
	4.0	1,503	788		2,291	25,304			
	計	4,863	2,193		7,056 (583)	232			
アカマツ	2.0	2,130	126		2,256	16,718	10.2	315	19,591
	4.0	300	67		367	2,558			
	計	2,431	193		2,623 (0)	244			
その他針						62	0.0	157	219
広葉樹		71			71	173	0.3	891	1,469
合計					19,783 (1,174)	1,372	100.0	16,692	205,260
目標達成率 (%)							85.7	55.6	82.1
計画数量							220,000	30,000	250,000
バイオマス用針葉樹チップ材 (単位:トン)									169.3

長級2.0には2.1を含む、()はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

日本の国内の森林が近年、外国資本によって買われている。そのほとんどが中国系資本による買収だとも言われている。この情報に接して筆者の頭の中に、ある連想の光がピカッと走った。「尖閣事件!」この尖閣事件は中国のあくなき領土拡張性向と日本政府のこの問題についての処理の拙劣さを浮き彫りにさせた。また素流協ニュース・第六十五号の当欄の中のインターネットト落書を思い出した。それは、く日本には謎の鳥がいる。正体はよくわからない。中国から見れば「カモ」に見える。米国から見れば「チキン」に見える。欧州から見れば「アホウドリ」に見える。……である。筆者をしてなぜ、「わが国の森林が中国系資本に買い進められている」ことが「尖閣事件」を連想させたかというところ、この事件に関して中国と日本との間の外交的やり取りを見てみると中国からわが国が「カモ」に見えたであろうし、実際に日本政府に対してカモ同然の対応振りであった。そして、今話題となっている外国資本による森林の買収問題について考えると、現在のわが国の私有林は、外資系資本にとって「ネギ」を背負ったカモ」同然である。

さて、なぜわが国の森林が「ネギ・カモ」と考えるのか、筆者がこれまでに見聞したことを元にまとめてみるが、その前にちよっと戯画めいた注釈をすると、「カモ」とは、美味なる獲物としてのわが国の私有林である。「ネギ」とは、「カモ(森林)」を獲得する時のいろいろな障害が少ないこと(容易性)とか獲得したカモについての所有権の確実性や利用度の自由性が十分に担保されるといった現今のわが国の森林

所有を巡る実態である。すなわち、カモを容易に狩ることができる道具やカモ肉をいろいろな料理方法を駆使して美味しく味付けしたカモ料理を賞味する時の調味料のようなものである。したがって、「ネギ」は、買収側にとって極めて重宝なものである。だが、買われる側にとっての「ネギ」は、自らの体制や制度の不備を意味し、具体的には、わが国の土地制度の盲点である。いくつか挙げてみると、①日本国内の土地は、国籍を問わず誰かが購入できる。しかも無制限に買える。国境離島や国家安全保障・重要水源林等の観点から極めて重要な土地でも制限はないのである。世界各国を見てわが国ほどノーゾロな国はない。②現在、わが国の地籍調査は、国土の約八割しか進んでいない。山林に限ると約六割が未調査なのである。公図が揃っていない土地の境界面定が図できない。そのような土地については、毛筆で書いた漫画のような図面しかないことから現地では紛争の元になる。外国資本が森林所有者になると近隣との間で所有権をめぐる争いが頻発する可能性がある。③日本の土地私権は世界一強い」と言われる。外国資本が日本の森林を所有した場合、当然強い私権を持つことになる。開発についても比較的自由な振る舞いができるのである。このようにわが国においては、土地を国籍を問わず誰かが無制限に購入でき、土地制度の原点ともいえるべき地籍も確定していない。にもかかわらず、私的所有権が驚くほど強いのである。

このような現状を私たちはどう考えるべきなのか。私たちは、国家安全保障・公共公益性の観点から、私たちが拠って立つ国土を守るための法制度の整備を急ぐべきではないのか!